富沢館跡発掘調査　遺跡見学会資料

ヨヘエクン

土塁に囲まれた館跡を探る！！

平成 26 年 11 月 29 日（土）
仙台市教育委員会文化財課

調査要項

【遺跡名】　富沢館跡（とみざわたてあと）
【所在地】　仙台市太白区富沢字舘
【調査面積】約 3,500㎡
【調査期間】平成 26 年 5 月 28 日～ 12 月 26 日 (予定)
【調査原因】仙台市富沢駅西土地区画整理事業
【調査主体】仙台市教育委員会文化財課

【調査担当】仙台市教育委員会文化財課
国際文化財株式会社
【調査協力】仙台市富沢駅西土地区画整理組合
田中則和 (宮城県考古学会会長)
柳原敏昭 (東北大学)
吉井　宏 (東北福祉大学)
竹井英文 (東北学院大学)

1．はじめに

土地区画整理に伴い、平成 25 年度から試掘確認調査並びに本発掘調査を行っています。富沢駅西土地区画整理事業地内には富沢館跡のほか、鍛冶屋敷前遺跡など６遺跡があります。

このうち、鍛冶屋敷Ａ遺跡では平安時代の竪穴住居跡、鍛冶屋敷前遺跡では平安時代の鍛冶関連遺構が今回の調査で見つかっています。

富沢館跡は平成 25 年度に土塁の測量調査を行いました。今年度は土塁の規模と形状と、館跡に関わる遺構の調査を行っています。

写真１　富沢館跡周辺の航空写真と遺跡位置図

2．富沢館跡について

富沢館跡は名取川の自然堤防上に立地しており、仙台平野部で確認されている中世の館跡の中でも最も良い状況で残っています。

延宝年間（1673 ～ 1681）の『仙台領古城書上』や仙台藩の関係者によって編纂された地誌類には富沢館跡の記述はありません。江戸時代には仙台藩士の入生田家が富沢館跡を在郷屋敷として使用していました。入生田家には入生田家や富沢館跡の由来を記した『館記』(寛政四年：1792 年) や『入生田家之故実』などといった古文書が残されています。これらの古文書には、富沢館跡は北目城城主の粟野大膳の造成によるものかとあります。

また明治時代の地籍図にみられる細長い水田が連続する箇所は館跡の堀跡と考えられ、館跡の規模は東西約 300 m、南北約 300 mに達すると想定されます。

図１　明治中期の富沢館周辺の地籍図
仙台市史編さん委員会　2006 年　『仙台市史特別編７　城館』より

写真２　昭和 20 年の富沢館跡周辺の航空写真
仙台市史編さん委員会　2006 年　『仙台市史特別編７　城館』より

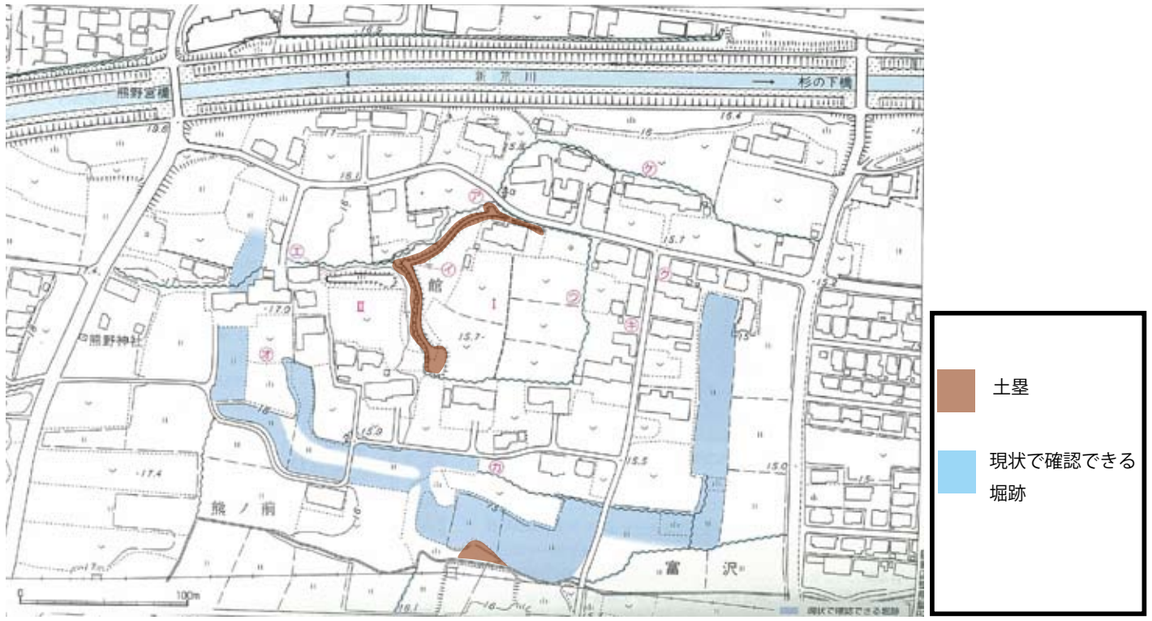


図２　富沢館跡の土塁と堀の位置図
仙台市史編さん委員会　2006 年　『仙台市史特別編７　城館』を一部加筆

3．富沢館跡の調査成果

写真３　富沢館跡に残存している土塁
（平成 25 年 11 月撮影）

写真５　門柱の基礎部分と考えられる柱穴

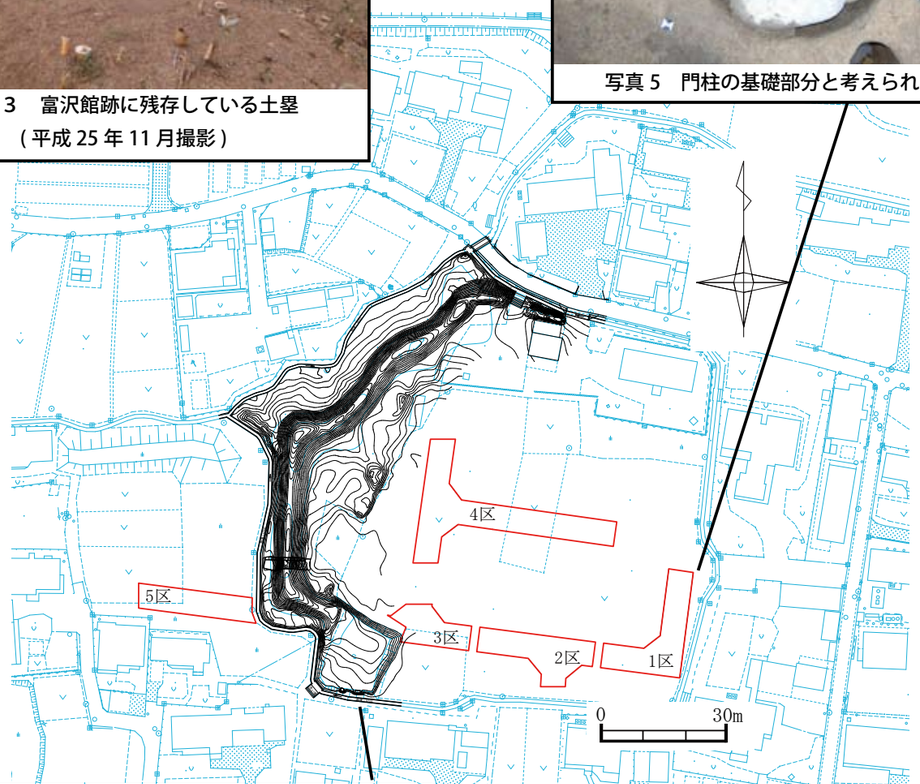


写真４　虎口（こぐち）　※２条の土塁が並んでます。

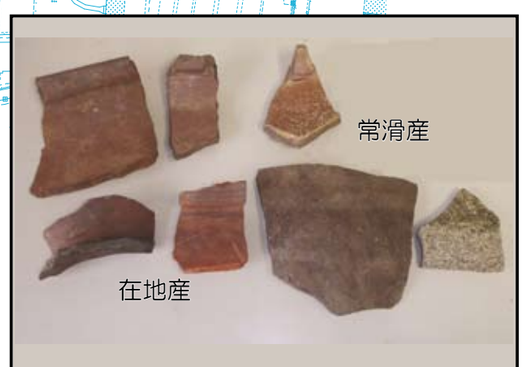


写真６　出土した中世陶器（とうき）

4．まとめ

- 今回の発掘調査で、富沢館跡に残存する土塁が、全長約 140 m、幅約 13 m、高さ約２ｍであることが分かりました。
- 南側では２条の土塁が並んでおり、富沢館の出入り口（虎口（こぐち））となっていたことが確認されました。
- １区では礫（れき）が詰（つ）まった柱穴を確認しました。門跡の可能性が考えられます。
- 遺物は、13 世紀後半から 14 世紀後半にかけての在地産の甕（かめ）と、15 世紀の常滑（とこなめ）産の甕が出土しています。

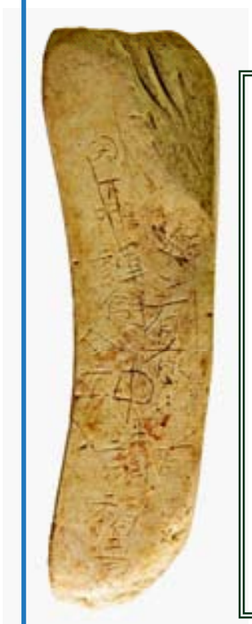
鍛冶屋敷（かじやしき）Ａ遺跡から出土した文字が刻まれた砥石（といし）

仙台市富沢駅西土地区画整理事業に伴って行われた鍛冶屋敷Ａ遺跡の発掘調査で、平安時代の竪穴住居跡（たてあなじゅうきょあと）から文字が刻まれた砥石が出土しました。

この砥石の３面に文字が刻まれております。最も多くの文字が刻まれていた面には、「謹解　申請稲事　合　」【書下し：謹（つつし）んで解（げ）し申（もう）し請（こ）う稲（いね）の事（こと）　合（あ）わせて・・・】とあります。これは古代の上申書の書式であり、定型化された書式が古代の地方社会にも広く知られていたことを意味します。

文字が刻まれた砥石は、これまで群馬県内の遺跡で出土しているのみで、今回鍛冶屋敷Ａ遺跡で出土した資料は東北地方で初めての出土例になります。

【国立歴史民俗博物館　三上喜孝准教授にご指導いただきました。】



□　有
有　有
謹解　申請稲事
合□□
□下□

大田部
有

上野□
上□□
上
#